参 加 者 の 感 想

会 期　平成３０年7月２６日・２７日

多くの方から感想をいただきました。また、城星学園小学校の芦田教式の実践録、脇田聡一郎著「文学教材の発掘と実践『みかんの木の寺』」をいただきました。情熱と気品が滲み出ている素晴らしい本です。文学教材を通して芦田教式の素晴らしさが示されています。よい土産をありがとうございます。
ご意見や質問などにお応えしながら所感を述べ、感想を寄せられた方々への謝意といたします。

初めて参加させていただきました。ありがとうございます。
○　芦田教式は聞いたことがありましたが、実際の授業を観たのは初めてです。教式＝易行道という「いつでも、どこでも、だれでも」という思想にはおおいに賛同します。無意識にできるようになるまで意識する。これが難しいです。芦田先生の全集をもっているので、読んでみようと思いました。
○　作文好きにするコツ。ケチをつけない。教師が直せば直すほど子どもは作文嫌いになるということを聞いたことがありますが、全く同じだと思いました。
書こうとしたことをほめる。書こうとした内容が見えるようになるよう難行・苦行をくぐり抜けないといけないと思いました。
１年生、入門期の作文はどのように書き方をおしえるのか？
○　音読と黙読の違いについて改めて勉強しようと思いました。授業された先生方、たくさんの学びをありがとうございました。
城星学園の先生方、すてきなおもてなしをありがとうございました。　　（M）

今回の授業参観で「国語の授業」について改めて考える機会になったようですね。いずみ会では、どの子も育つように何をどのように指導するかを考えます。その手引きが七変化の教式です。その核心は「今もっている力を最大限に発揮させ、それが自らを育てるのだと気づかせる」ことです。それは、どの子も「自らを育てる力を備えている」からです。
入門期の指導等についてはＨＰをご覧ください。
（芦田教式　http://www.kyousiki.com/　いずみ会　http://izumikai100.web.fc2.com/　）

本日は、第二次指導の授業を見させて頂き有難うございました。芦田式の第一次指導（概観）は、これまでも、自分でも取り組んできましたが、第二次指導は文の心にせまる授業ですのでなかなか難しく満足できたことがありませんでした。
本日の授業では、二とくで図を描いて、第一次のおさらい及び全容をまとめる方法など、とてもよい勉強ができました。六とくの区分も、よく考えられていました。「自然のかくし絵」は、本当に感動しました。
作文指導も、反省を含めながら学ばせてもらいました。ありがとうございました。（A）

「自然のかくし絵」は、教式の素晴らしさが具体的に出ています。単純化と再構成です。第二次指導《二とく》は、かくし絵を略図で再現し、第一次指導のおさらいをしました。絵の内と外の関係を鳥瞰しています。おさらいは、前時の繰り返しではないのです。《六とく》では、かくし絵の働きを「色・形」だけでなく「場所の選択」と「じっと動かない」も扱っています。第一次指導《六とく》と重なります。

十年（？）ぶりの参加。しかも初めての会場でしたが、皆様のおかげで楽しく学ぶことができました。
特に今回は、城星学園小学校の若手の先生方と共に学べたことは、大変意義深かったと思いました。これから新しい空気が吹き込まれ発展していくような予感もして、３日間楽しむことができました。（前夜祭からの参加）
現職ではありませんが、それでも学びの場になるいずみ会の新しい価値を見つけた気がします。まさに、教壇修養会、人としての学びの場であり、皆さんが子どもたちからパワーをいただける場でもあるのですね。ありがとうございます。
最後になりますが、亀谷校長先生はじめ城星学園の先生方には、大変よくしていただきありがとうございました。今後とも一緒に学べることを楽しみにしています。　　（T）

参 加 者 の 感 想

会 期　平成３０年7月２６日・２７日

いずみ会は、不思議な会です。退職者が喜んで参加してくれます。久しぶりに顔を見せてくださる方もおられます。参加された方からは、子ども達から元気をもらえたといいます。同じ教式で授業しているのに登壇者の個性がはっきりと出てきます。教式は型にはめると批判される方がありますが、今回の修養会でその心配はないことが分かるでしょう。また、型が決まっているのでどの子も安心して学習に取り組むことができます。最近、ユニバーサルデザイン教育が説かれます。多くの子が参加しやすい授業のことだそうです。教式で授業すると学級が落ち着いてくると聞きますが、理に適っている話ですね。

第１３６回国語教壇修養会に参加させていただきありがとうございます。城星学園小学校の若い先生方の意欲あふれる授業への取り組みがすばらしいと感じました。
いずみ会以外での教式への取り組みを初めて拝見し、改めて教式について考える機会をいただいたように思います。これからまた、カタツムリのような歩みですが、教式について学び続けていけたらと思います。
貴重な学びの機会を与えていただきましたことに、心より感謝申し上げます。（K）

若い先生方の熱い視線を感じました。城星学園小学校での教壇修養会は、いずみ会員にとって大きな学びの場でした。姿勢のよさ、しっかりした読み声、大きく筆圧のある字、集中力、深い考えなど、教式で育っている姿に直に触れることができました。また、ノートや定規の使い方が参考になりました。

前夜祭を含め充実した３日間を過ごすことができました。
① 会場校　城星学園小学校の先生方に心から感謝します。大地にがっちり根を生やし、誠心誠意尽くしていただき、何といってよいか分かりません。ノート指導、いずみ会と共通する“共に育ちましょう”が学校中に感じられ感動しました。もっともっと伺いたくなりました。
② 授業者・講演者、いずみ会の先生方には、わかり易いお話を更にかみ砕いて伝えていただき、目からウロコでした。
③ 参加の皆さまと交流させていただきました。
☆ すばらしい子ども達を育ててきた先生方の姿を知りました。ぜひ、来年も大阪で学ばせていただきたい。熱い熱い想いを東京に届けます。
☆ 名札への記名、お茶のプレゼント、かわいい城星小の袋、どれも心に残りました。おもてなしの心が自然ににじみ出ていました。
☆ 交通便利で２日の日程も可能と思いました。濃い２日間でした。　（S）

城星学園小学校は、『世界に社会に貢献できる誠実な・心豊かな人に』を願って教育活動を展開しています。「光の子」を目指して努力する児童一人ひとりに「同伴する」という建学の精神は、「師弟同行」の道を歩まれた芦田恵之助先生の生涯と相通ずるものを感じます。それが、猛暑の中、さわやかな教壇修養会になったところに現れています。また、校内研修用の指導案を示していただいたので、いずみ会で学んでいる教式を改めて見直すことができました。更に、鈴木佑治先生が、国語科指導の単純形態としてまとめられた「七変化の教式」の第２表の意義が見えてきたように思います。ありがたいことです。

この度の国語教壇修養会に参加させていただき厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。
「七変化の教式」を校内で研修されている城星学園小学校で学ばせていただけたことは、本当にありがたいことでございました。子どもたちの育っている姿を目の前にして、城星小学校の成されている日々の営みの凄さを思いました。「七変化の教式」の実践が校内で取り組める学校は、日本中探してもないのではないでしょうか。そんな思いがしています。２日間、教壇を通して修養会が開かれましたこと、このご縁に感謝し、芦田先生の道が若い先生方に受け継がれていくことを切に願っています。城星小学校の先生方のお導きをお願い申し上げます。
酷暑の中、冷房のお部屋等々お世話になり、重々お礼申し上げます。　（N）

参 加 者 の 感 想

国語教壇修養会が城星学園小学校で開かれたことに光明を感じます。若い先生方が熱心に授業を参観されたり、講座で質問されたりしている姿から次代を担う教師が育っていると…。教式はシンプルです。一心に文章を読む楽しさを味わう指導法です。教師が教材を読んで心に響いたことを子ども達と一緒に考え、共鳴する指導法です。学校の授業だけでは、十分な知識は得られません。学ぶ場は、身の回りにあるのです。好奇心を引き出すことが、小学校教育の眼目です。教式は、自覚を促す指導法なのです。

まず、どの学年の児童も大変に素晴らしい学習姿勢でした。先生方の日々の学級指導、学習指導がきわめて丁寧になされていることがよく分かりました。授業中はもちろん、授業の始まる前でも、子どもたちにかけておられる言葉が温かくかつ的を射たものでした。

全ての教壇が、ゆったりと時間の流れる授業で、私のものとは全く異なると感じました。芦田教式の授業を拝見する度に、自分の教材解釈の至らなさに直面する想いを繰り返していますが、今回もまさにその通りでした。自分がいくら教材を読んでも気づかないだろう、という深い解釈に触れることができました。最後の石原先生の「本当によかったと思っていることが分かる一字」、まさに字眼であると、助松先生のお話を思い出しました。二日間、京都では絶対に体験できないすべてが芦田教式を含んだ教壇。本当に楽しくうらやましく心に残りました。

この二日間で、北川先生のご指導が心に残りました。到底私にはできない授業の構成、解釈でありました。老兵は去るべきか、と心底より思いました。城星学園小学校のお二人の先生の授業を拝見しましたが、お二人とも、説明が大変効果的でした。お二人とも常に笑顔でした。脱帽です。現物を用意されたり、細かく調べておられたり、と。考えさせることも重要ですが、報せることも重要、と改めて知りました。ありがとうございました。

玉造小学校の北西にオニグルミの木がありました。秋には実るでしょう。（略画有）こんな実の中にクルミがあります。　（H）

同感です。そういう育ち方をしている子どもたちも幸せだなと感じます。

毎回、教壇修養会で授業を参観された方から同じような話を聞きます。時間がゆったりと流れるように感じるのは、授業に無理がなく自然な流れになっているからではないでしょうか。筋が通っているといってもよいでしょう。プロ棋士は対局後、検討会を開きます。その時には、並べ直しながら検討します。どうして覚えているのか疑問でしたが、理に適った手をお互いに打っているからだそうです。教式通りの授業だと録音なしでも授業記録が書けるようになるものです。それは、《二とく・六とく》の問答は一問一答形式ですが、記者会見とは違い、問答に流れがあり子ども達の思考を深めていくからです。

「文章の核心を掴んで授業しなさい」がいずみ会の教えです。それを、字眼を押さえる(掴む)といいます。詩「よかったなあ」は、『あ』(字眼)の発見に向って授業を組み立てています。四連の「ああ」の後の『あ』も同じでしょう。「風切るつばさ」は、『信』の意義を考えさせる授業になっています。

今日の授業を、今の自分の精一杯を出すしかないと悟ったものは、笑顔が出てきます。子どもにもそれが通じるのです。そういうときの失敗は、成長の糧になるのです。それが、教壇修養会の意義の一つです。普段できないことに挑戦するから飛躍があるのです。暗写で板書に挑戦するのもその一つです。

実りの多き研修の場に参加させていただいたことを感謝致します。

本校で教式を取り入れてから、書くことが読むための手段でなく、きっちり、力強く、ていねいに書くことが目標の一つになっています。それは本校の特色にもなり、きっかけを与えてくださっていることに感謝です。

教式の一問一答形式は、誰にでもできるようには思いませんでした。何度も何度も教材を読み、練習を積まなくてはスムーズな展開に至らないと思います。

詩の授業をなさった先生は教材を見ずに板書されました。児童とのやりとりも“すごい”と感じました。（見事な壇です！　教材の暗写に挑戦すると発見がありますよ）

物語文を、子どもの思いを語らせず、児童のお互いの気持ちを理解する機会のない形態に、ずっと疑問を持っています。先生と児童の関係はよく見えました。でも、児童間のコミュニケーションはありませんでした。融合した学習法はないのだろうかと思っています。　（Y）

参 加 者 の 感 想

問題意識は、自分を育てる力になります。お若い方々の今後に期待をしています。

さて、教式は単純です。読んでは考え、書いては考えることの繰り返しです。ですが、そこに秘密があるのです。同じことの繰り返しではいけないということです。繰り返しながら的を絞っているのです。その中心になっているのが＜四かく＞です。書写することは、ゆっくり読むことです。また、正確に読むことでもあり、深く読むことにも通じるのです。教材全文視写が妙案を産むと先達は教えています。

この教式では、＜四かく＞を中心にして授業が組み立てられています。ですから、児童の話し合いの時間を確保することが難しいのです。そこで、私は、第四次指導として作文の教式で「感想文指導」を行っていました。物語文でも説明文でもやってみましたが、多様な感想を楽しむ授業になりました。

もう一つ、教式での読みの指導は、深い理会（理解：辞書で比較を）を求めます。子ども同士の意見を交換することは大事な学習ですが、具体的事実を前にして話し合うことが有効だと思います。その意味では、社会・算数・理科等の実学や諸活動の場面で大いに伸ばしてほしいと思います。

２日間の国語の授業を観させていただき、とても勉強になりました。特に、作文の指導の仕方や漢字の教え方が新鮮でした。

作文指導では、あれだけ子どもたちが静かに取り組める姿に驚きました。私は、１年生の担任をしており、作文指導は今からしていくために、この研修で学んだ「前から動かずに質問のある児童に前へ来させる」方法や「書いた作文を授業で取り扱い、個別指導を行う」方法を実践してみたいと思います。

夏休みの間に教材研究を行い、子どもたちが「わかる」「楽しい」と思える授業を行えるようになりたいと思います。　（Ｙ）

自分の課題を発見できた修養会でしたね。いずみ会での作文の授業は、教科書にある教材のように取り扱いません。教式で読みの指導をすると時間が短くなります。そこで、作文の時間も確保できます。工夫してみてください。「質問のある子は先生の所に来てください」と１年生に話すと、行列ができてしまいます。そこが問題点になりますが、師弟共すぐに慣れてきます。２学期から始めるのならば「自分の今もっている力で書いてご覧なさい」と伝えます。一切注文をつけません。読みの指導で培った力があるからです。書かれた作品は宝の山です。どんな宝が埋まっているでしょうか。考えてみてください。

今回このような会を城星学園小学校で開催でき、大変にうれしく思っています。思えば１５年ほど昔、まだ私が新任教員としてこの学校に来たころこの授業に出会いました。その前の学校で教えていた仲間も同じくそのころにこの授業と門真市で出会ったそうですが、彼はその方法を快く受け止めてはおらず、私とは相反する感想をこの授業方法に感じていたことを思い出します。

私がこの方法に感銘を受けたのは、本校で初めての参観日の授業だったと記憶しています。自信を持って教壇に立つことができなかった私が、そのときの私のレベルである程度の自信を得ることができたという感覚を覚えた授業でした。もちろんその当時の授業を全部自分で考えたのではなく、当時の教頭先生にある程度の台本を書いてもらって、まねたのが始まりでした。完璧にコピーすることは当然できませんでしたが、当時の私にとってはすばらしい授業の羅針盤となりました。あれから１６年たちました。今でもその出会いの感覚を大事に授業を考えております。今回の会で皆様とともに国語とか初等教育のありかたについて考える時間をすごせたことは大変な財産となると思います。（次は、感想に同封された手紙です）

とても意義ある会だったと職員室の引っ越しをしながら、仲間と話しています。　（Ｉ）

出会いの感覚、第一印象ほど恐ろしいものはありません。私は、中高理科免許で小学校教諭免許なしでしたが、都の小学校助教諭となりました。私の状況を見て、助松校長先生が国語の授業を個人教授してくださいました。３か月ほどすると、国語の教科書が面白いと思うようになっていました。小学校時代から国語嫌いだった私が国語はこれで行こうと決めて以来、５０余年も続いているのですから不思議です。今回もよい種を拾いました。この歳になっても出前授業しようと思える幸せをかみしめています。

参 加 者 の 感 想

二日間、ありがとうございました。
授業をさせていただくという光栄な機会を与えていただいたことに感謝しています。二日にわたって１時間目に授業をさせてもらったので、自己流で授業を展開し、そのあとに拝見した先生方から学ぶことが多かったように思います。板書、むちのうち方やもち方、問いの作り方など、まだまだ勉強していきたいです。
午後からの先生方の講話には感動いたしました。今まで教式について、人から聞いたり、本を読んだりしていたことを実際に目の前にして、今まで分からなかったことが少し理解できるようになりました。
いずみ会の先生方からは、心温まるお言葉、そして、二学期に生かせるアドバイスをいただき、うれしい限りです。またお会いできればうれしいです。　（O）

城星学園からは、お二人の先生が授業してくださいました。貴重な会となりました。
今までにも、開催校の先生方が授業したことは何回かありましたが、いずみ会員がほとんどでした。芦田先生の残された七変化の教式で多くの先達が育っています。いろいろな伝承があることも事実です。今回、そのことがよく分かりました。いずみ会を育てられた鈴木佑治先生が、後進の指針として整理してくださったのが「国語科指導の単純形態」です。鈴木先生は、書物を書き遺されませんでした。それは、芦田先生の著書に全てが書かれているからだというのです。今残っている「国語科指導の単純形態」は、教壇修養会の折に鈴木先生がお話になられたことを広島県因島の香川先生がまとめられたものです。
いずみ会には、桃栗三年柿八年ではありませんが、板書三年鞭八年の言い伝えがあります。板書は、自分磨きのよい方法です。時間を見つけて練習してください。板書中に集中が切れ、ふっと他に意識が向くことがあります。そういう時には、間違いが板書に出ます。また、教案ノートに書きとめる時にも同じことが起こります。それに気づかずに、板書すると板書後の点検で間違いに気づきます。心の乱れが板書に出るのです。板書後に確認します。大事の前の確認です。その後ろ姿が子どもを育てるのです。
鞭の振り方は、半呼吸先を振れと教わりましたが、私にはうまくできません。米澤徳一先生のビデオがありますので参考にしてください。(芦田教式のＨＰ)合唱の指揮者に教えを乞うのもよいのですが…。

先生方がどの授業でも、何度も色々な言葉でほめてくださるので、子どもたちは授業後、とても誇らしい表情に変わっていたことが印象的でした。それと同時に、私たちも我が子らがほめられて、とても誇らしい気持ちになれました。この教壇は、子どもも先生も学校も力をもらえる貴重な時間なのだなと分かりました。と同時に、日頃の学級での自分の姿を思い出し、もっともっと子どもらをほめてやってもまだ足りないくらいだと反省もしました。
授業を見て、聞いて、学んだことを、そして、教えていただいたことに助けられて授業ができました。そのことは、私にとって一番の学びでした。たくさんの助けのおかげで、ようやくできた授業です。一人で考えるうちは出口のない孤独の学びでしたが、自分では表現できなかったことを「こうしてみてはどうか？」とか「こうなんだよ。」とか教えてくださった言葉の中に答えを見つけた時、出口が見えるようになって、終わりまで走り抜けることができました。ありがとうございます。　（K）

芦田教式の精神を吸収されています。自らを育てる教師によってのみ子どもの学習は成り立つのだということです。壇に立つまではいろいろあったでしょうが、今の精一杯を出すしかないのです。そう腹を決めておられたのでしょう。子ども達の前では、堂々として授業されていました。それが、子ども達を引きつけ、深く考えるようにさせるのです。ノートにどんなことが書かれていたか知りたいものです。
教材の解釈については、いろいろあるでしょうが、友情を中心に据え、それが揺らいでいく姿をはっきりイメージできる授業を作っています。教壇修養会では、授業を通して新たな発見ができます。特に授業者は得るものが多いです。どんな発見があったのか、いずみ会の筆録に載せたいと思いますが…。
幸い、城星学園小学校は学年３学級あるので、いろいろ試すことができます。今回の経験を日常の授業に生かす工夫をしてください。これはと決めた教材は、公開授業にして都合のつく方に参観批評してもらうのです。２人寄れば話し合いができ、３人になれば知恵も生まれます。工夫してみてください。

参 加 者 の 感 想

この度は、貴重な学びの場を設けて下さりありがとうございます。
日々の実践の中での不安やつまずきがあり、自分の力では解決できなかったことに対してのアイデアや指導法のヒントをたくさん得られました。
どの先生の授業でも、共通していたことは、子どもを尊重することでした。それが、私にとって、今回、一番学んだことでした。
どの子も自分の意見や思いをくんでくれる教師を望むと思います。失敗すること、恥をかくことを嫌うと思います。そんな子どもの心にそっと安心という雰囲気で包み込むような授業でした。
私も、これからもっと子どもと共に、子どもから学びとってゆけるよう努力したいと思います。ありがとうございます。　（K）

心優しい教師の感想です。いずみ会では、子どもは学級の雰囲気で育つと教えています。教式は、教育的な配慮がある指導法です。その例を《一よむ》から拾い出してみます。
①読んでみたか、と問います。読んでみたかは、自覚を促すための声掛けです。読んで来なかったら読んで来ないでよいのです。それは、子どもにもいろいろな事情があるからです。また、読んで来なかったと自覚させることに意味があるのです。そこで、過ぎたことにくよくよさせない生き方を学ばせる「読んで来なかったら、一生懸命聞けば分かるから大丈夫だよ」と伝え、前向きに今できることに集中せよと視点を変えさせるのです。これは、子どもには育とうという力が内にあるのだという絶対信頼の上に立っての指導です。自ら動き出すのを根気強く待つのです。これが、教師を育てるのです。焦ってもダメ、緩んではなおダメ、１年間通して気付くのを待つ姿勢を失わないことです。
②順繰り読みをします。機械的に割り振るのがよいのです。これを公平といいます。子どもにもプライドがあります。それを失わないようにするのが順繰り読みなのです。読めなければ、先生が代わりをすればよいのです。他の子が口出しをするのは心を傷つけます。教え合うということは美しいようですが、上下関係が生ずることにもなり、漢字を知っていることを自慢したり、人を馬鹿にしたりする子を育てることにもなるからです。が、対等に渡り合える者同士なら教え合うことは非常に効果的です。
③読み手より聞き上手な子を育てることに注力します。これも教室に静けさをもたらします。
以下は探してみてください。

２日間ありがとうございました。とても勉強になりました。
城星に勤めるようになって、教式を知りました。私が芦田式の教式で一番楽しく感じていることは、自分で読み深めて授業の展開を考え、その考えを一緒に学年を組む先生方と深め合う(分かち合う？)ことです。そんな時が大好きです。あんなに考えて導いた展開なのに、先輩の先生方の展開や落としどころを聞いて、“確かに！”本当だ！“と思ったときに”深いなー！楽しいなー！“と感じます。
この２日間で、教えてもらって気づいたこと（読みの順序を後ろから横にまわっていくことや児童の読み、ほめ方）は、明日からすぐに使える技術として自分の力になりました。教式については、これからもゆっくり考え学んでいきます。
２学期からも、早くやりたいな、と思わせていただけ、とても幸せです。ありがとうございました。　（Y）

教師としての資質が溢れています。自ら喜ぶという生き方が素敵です。素直にものを見るのも教師としての大事な心構えです。
私は、教式を一緒に学ぶ仲間が学校には居ませんでした。東京いずみ会で月１回学ぶのが楽しみでした。城星学園では、学年の先生方と話が出来ることは幸せなことです。都合のつく方に授業を見ていてだいて指導を仰ぐことも可能です。そういう実践を積み重ねると、すぐに勘所を見つけることができるようになります。いずみ会の教壇修養会では、教案を印刷して出しません。朝立てた案を尊重するからでもありますが、教式があるので授業を見ればねらいが読めるからでもあります。参観の視点は、授業の方向性に狂いはないかということです。それを確かめるのが修養会です。深浅は仕方がありませんが、方向の狂いは子ども達を育てることになりませんし、教師の力量もつかないからです。

参 加 者 の 感 想

国語教壇修養会に参加させていただき、ありがとうございます。
昨日は、体調不良で欠席したのですが、本日、無理して参加させていただいて、体調が少しよくなったような気がします。
授業はもちろんのこと、その後の「本日の授業について」と「教式の話」はとても勉強になりました。長年国語教壇修養会に参加されてきた先生方でいらっしゃるのに、初めての先生であっても気軽に取り組めるように、分かりやすく話して下さって有難かったです。
作文指導でずっと悩んでいた事が、すっきり整理されたような気がします。次回は高学年での作文指導を教えていただけたら嬉しいです。昨年度、高学年の作文指導で苦労しました。しかし、それは回数が少なかったということも自覚しました。回数を多くし、山本先生の方法で指導していけば子ども達は作文好きになるだろうと思いました。　（O）

体調は回復したでしょうか。作文の教式に触れることができたことはよかったですね。
芦田先生が世に出られたのは、綴り方教授が先です。今の日本の作文教育の源流になっています。作文教育もいろいろ発展する中、いずみ会では、芦田先生が残された作文指導を続けています。子どもに好きなように書かせて、そこから指導の種を見つけていきます。別な言い方をすると、子どもが書いたものを尊重するということです。今の実態に即して指導していくということです。
作文は書かなくては力が育ちません。また、書いてみたいと思わせるために批正の授業をするのです。主は記述の時間です。一般的には、批正の時間が主と考えているのではないでしょうか。うまく書くために間違いを訂正することが、作文力を育てると考えているようです。いずみ会ではそこを神経質に考えません。それより、第一読者である担任が喜んで読むことを優先し、その喜びを皆の前で話しています。ですから、添削もしません。記号をつけて促すだけです。
机の前でなくても読むだけならいつでもできますし、細切れの時間も活用できます。それが、子ども理解につながり、ちょっとしたタイミングでも話しかける種をもつことができます。子どもとの関係が自然によくなっていきます。
今回の批正では全員を取り上げましたが、クラスで行うのであれば、１０～３名程度でよいでしょう。３回に１回は、どの子も取り上げるということでよいです。今日は私のことを話してくれなかったけれども、先生は自分のこともしっかり読んでくれていると伝わるように工夫します。試してみてください。

やはり子どもの心を育てるのは国語の授業であると再認識した。本校では十数年前に子どもの情感を豊かにするためや心を育てる指導として、国語の指導法の研修に力を入れてきた。その中でこの芦田式の教式を採り入れて研修を積んできた。私自身は国語の授業から遠ざかっているが、教材研究や発問をどうするかなど考えることが楽しくもあった。だだ考えている時は「産みの苦しみ」なのだが実際の授業での子ども達の反応は心踊らせるものがあった。
今回の授業では教式による詩の授業は初めて目の当たりにして感激した。あれ程深く探った授業だと子ども達の心も揺さ振られ情感も育てられるのだろうと感心した。
もう、国語の授業に携わることはないだろうが、是非今後とも深め進化させていって欲しいと強く思った。やはり、教育は、特に小学校教育は国語で始まり国語に終わる。国語教育の充実を願う。　（H）

ありがとうございます。城星学園小学校の芦田教式の歴史が分かりました。心豊かな子どもを育てるのに、芦田教式をよく選んでくださいました。そして、それを育てていただいたことに頭が下がります。
七変化の教式は読みの指導法です。『読むことは自己を読むことなり』と芦田先生は残されています。心を育てる読みとは親和性の高い指導法です。七変化の教式で物語文を指導すると、どの子にも余韻を残す授業ができます。余韻をどう残すかに苦心するのも確かです。脇田先生も「みかんの木の寺」の和尚の言葉を取り上げて、「子どもたちではそこまで思考が届かないところに教師の読み抜いた問いを投げかけていく」ことの楽しさを記しています。
教式の骨組みのよさを理解するのに適している教材は、説明文だと思います。区画によって事実がはっきりできます。また、その事実を知らせようとした筆者の願いを読み取ることもできます。そこにいずみ会での説明文指導の特徴があります。今回は、自然への興味関心(不思議)を引き出す教材でした。

参 加 者 の 感 想

２日間、とても勉強になりました。城星で勤めて５年目になります。芦田教式を実践し始めたのも本校に勤めてからでした。

国語の指導は漠然とし過ぎていて、苦手意識がありましたが、型が決まっているのですぐに馴染めました。修養会でおっしゃっていた通り、本当に誰にでも真似できると思います。私自身、城星に来て３年目、全然落ち着きつかない学年の国語の教科担任をした時、教式の授業は子ども達も落ち着いて授業の方に向き、やり易く感じていました。教式は教材研究が大変だけど、苦労した分、授業はやり易く感じます。

今回、私自身、大変勉強になったのは、作文の教式です。今まで「こう書きなさい」と指示ばかりしていたので全く逆のことをしていました。作文の教式も、一度実践してみたいと思います。

教式について深められる２日間となりました。ありがとうございます。　（Ｉ）

私の教壇修養会参加は昭和５０年・第７０回大会からです。作文の教式を本格的に始めたのも、それからです。３６名を担任したときには、全員を１回は聴写文に取り上げようと決めて挑戦しました。３名ほど気になる子がいましたが、誰でも年に１，２回は、これはという作文を書くものです。他によい作品があっても、そういう子を優先しました。すると、３６人全員を聴写文に取り上げることができました。週の後半で記述、週末に授業の準備、翌週の前半に批正をしていました。週２時間の作文の時間を確保していたことになります。今は時間的に無理でしょうが、その経験が私を育ててくれました。

２日間、研修に参加させていただきありがとうございました。

私は、国語科ではなく、外国科の教員です。「言葉を扱う」という部分で国語科と外国語科には共通点があると感じています。読み深める、子どもが自分で読むだけでは気づかないようなところに導いていくということ。これは、どんな言語を扱っていても、目標に定めなければいけないと、今回の研修を通して思いました。本を読めば分かるようなことをなぞって授業している自分を反省しました。そして、どの子にも分かる、落ち着いて学習できる、と何度もくり返しおっしゃられていたことも印象的でした。６年間、どの先生に国語を教わることになっても、同じように落ち着いて学習の積み重ねができるその教科においても理想だと言えるなと感じました。　（N）

全く同感です。教壇修養会で外国語科の担当されている方の話を初めて伺いました。同志を得た思いです。今後も一緒に歩めたらと思います。

私たちは、《一よむ》を大切にします。聴くことに集中させます。それが腰を立てて本を持ってという指示に出ています。それは、文章を一読したら何か頭に残こすことを求めるからです。挿絵がある場合には、それを使って問答することがあります。よい挿絵とは、それが可能な絵を言います。これは、第一次指導概観で行うことを原則としています。第二次指導は、具体的な文章に即して考える場です。挿絵に戻ると文章そのものへの取り組みが緩みます。また、国語科の読み物教材は、そこに示された文章と図・絵・表・グラフだけを使って読み解く力を養うことだと考えています。それが不可能な教材は、不適切な教材です。社会科等で資料集や地図帳など使う前提で書かれた文章は別でしょうが…？

私は、６５歳から百校以上の学校で３００回以上の出前授業をしてきましたが、第一次指導《二とく》で問いを出すと、教科書をめくり始める学級に出会います。多分、その学級では、詳しい答え(書かれている通り：書かれている場所)を要求しているのだと思います。いずみ会では、強く印象に残るであろうと思うことを問いの形で出しながら話を整理(再構成)しています。

いずみ会では、書かれている順に問いを出すことは、北海盆歌（それからどうした）といって子どもが頭を働かせない問いといい、工夫が足りない典型だと指導されてきました。

私は、中学２年生で英語に見放されましたが、今なら教式を応用して英語と仲よしになれたのではないと思っています。①音読②情景・場面の想像③全文視写④板書(指黙読・指音読)⑤内容確認⑥取り立て指導⑦音読・暗唱などはどうでしょうか。中学校の教科書で再チャレンジして確かめて見たいような気になっています。東京オリンピックを楽しむためにも、老化防止のためにも役立つだろうと？？？

参 加 者 の 感 想

先生方が、子どもたちをよく見られていることが心に残りました。

まず、発問や説明を理解しているかどうか、子どもたちの表情を常に見ておられると思いました。そして、その子どもたちの答えから、全体の反応を見て、次の言葉を返されていると思いました。

次に、子どもたちが(全員)わかりやすいように、教えることを絞っておられることが心に残りました。あれもこれもと教師が説明するのではなく、中心になる言葉を押さえて授業をされているので、全てを細かにしなくても、後は同じように読めばよいと話されていました。

子どもたちも、初めてお会いした先生方とは思えないほど子どもたちが落ち着いて先生のお話を聞き、先生方が自分たちのことを大切にしてくださっていると感じたようです。　（S）

授業参観の目のつけどころが素晴らしいです。いずみ会では、授業参観するときには、子どもの顔が見える場所を選ぶように勧めます。子どもの反応・顔つき・視線と教師の対応がよく分かるからです。間や呼吸が感じられるからでもあります。教えるということはたくさん覚えさせるということではないのです。考える、頭を働かせる、智慧を磨くことを主にします。すると、扱う内容が精選されてきます。端的に言って字眼をつかむということです。教師は、下調べをするとそれを全て伝えたくなる性質をもっているようです。調べたことを教師の骨肉にするのはよいが、それを生で出すのは子どもに下痢をさせることになると、注意喚起しています。情報を増やすのではなく、書かれたことの本質に迫ることを考えます。第一次指導概観では、今日の授業をポケットにしまって帰れるようにすることをめざします。区画数が多いとそれが難しくなるので１０を超えないように区画を再考します。

研修会ありがとうございます。長年研究されている先生方のお話、授業を見る機会、本当に貴重な経験、そして充実した時間が過ごせました。

国語の授業は、低・中学年は多いため、１日２時間やることも多いです。その中で“漢字と授業”という感覚でいた自分を反省しました。漢字指導も作文指導もこの教式を通してしっかりつながっているんだと思いました。この夏を利用して、詩や作文の授業を作って、二学期どこかで挑戦したいと思いました。

今回は運営に携わらせて頂きました。教育祭では、たくさんの先生とお話し、勉強させて頂きました。楽しく、実りの多い二日間でした。ありがとうございました。

至らぬ点も多々あったかもしれませんが、今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。

（N）

運営担当には、特にお世話になりました。日程的に厳しい面もありましたが、城星学園小学校のみなさんの心配りに助けられました。ありがとうございます。裏方をしながらの授業参観でしたので苦労も多かったと思います。実りの多い２日間だとの感想をいただき、私たちも嬉しいです。子ども達に助けられたという登壇者の話を聞くにつけ、よい教壇修養会になったなと思います。

漢字練習帳を使ったりドリルをしたりということも必要なことですが、いずみ会では漢字が読み書きできれば、文字語句の意味が辞書で確認できれば、教材文が読めるとは考えません。また、漢字を学習ときに機械的な繰り返しは避けます。詩の授業での『あ』に気づくかどうかにそのことが出ています。よく分かった、面白かったという子ども達の心を最後の読み声で確かめます。張りのある声で豊かな読み声が聞こえた時は、大成功です。詩の授業の最後の暗唱の声を思い出してください。

新任のため、初めて教式という手法に出会いました。一学期の間、国語の授業はいつも手探りで、先輩方の見よう見まねでなんとかやってきました。今回、自分の勤める学校で、教式について勉強をする機会を頂けて、本当に糧になることばかりでした。

いずみ会の先生方の実践を目の当たりにして、教式の型を守りつつ、子どもの実態に合わせて、臨機応変に指導形態を変化させる手腕に圧倒されるばかりでした。普段から同じ環境にいる教員同士ではなかなかたどり着けない気づき、考え方に触れ、充実した２日間を過ごせました。

（W）

参 加 者 の 感 想

会 期　平成３０年7月２６日・２７日

「芦田教式の型は、自然だ。先ず読む、読んだらどんな話か考える。考えるときに手掛かりになるのが題名だ。それが題目の扱いから入る理由。次に、更に詳しく読むために重要だと思う語句を書き出す。自分の心に響いた語句を書き出すといってもよい。その次は、書き出した語句を眺め、どんな話で、どこに大事なことが書かれているのかを考える。ここまでが、第一次指導概観で、宝物の地図を手に入れるといってもよい。それをどう使いこなすかは、授業者の創意工夫に期待する。子どもの実態や教材によっても変わってくる。そこが、教壇修養会をする意義でもある。」

教師は職人でもあります。ビデオがよいが、IC レコーダーでもよいから記録を残して自分の授業を客観的に見てみましょう。課題が発見できるはずです。事実を示して先輩に相談するのが上達の近道です。

感想に触発されて出てきた言葉を書き連ねました。全体を考えて整理したものではありませんので、説明不足のところもあるかと思います。また、感想の転記、語句の変換での間違いは、こちらにあります。その点もご容赦ください。

今回は、特別な会になりました。いずみ会創立７０年になることを田村晃先生に指摘されました。いずみ会は、昭和２３（１９４８）年に鈴木佑治先生が芦田恵之助先生の正風を後世に残そうと始められた国語教壇修養会です。記念すべき会になりました。

大阪には芦田教式を継承する恵雨会があり、林田勝四郎先生を中心に活発に活動されていました。城星学園小学校で芦田教式の指導をされた脇田聡一郎先生も恵雨会で学ばれたのではないでしょうか。縁が熟したというのか、今回こうして共に芦田先生の残された皆読・皆書・皆綴・皆話の道を求める教壇修養会が開けたことを喜んでおります。『共に育ちましょう』が教室にみなぎる会になりました。

今後も、それぞれの歩みの中で伝えられた教式を、後世に残す道が続くことを願ってお礼の言葉とし、感想を寄せてくださった方々に改めてお礼申し上げます。

平成３０年８月吉日

いずみ会 会長　橋田 篤男

各 位

後日届いた感想を以下に記します。　　８月 23 日

残暑お見舞い申し上げます。

今回初めて国語教壇修養会に参加させていただき、芦田式の授業がどのようなものであるかを知ることができました。論文執筆中に授業を拝見させていただいていたらなあと、つくづく思いました。

また、早速に『感想集』をお送りくださり、誠にありがとうございました。私の方も感想をお送りせねばと思いながら、ついつい後になってしまい、大変失礼いたしました。

私は、芦田の随意選題思想について、その成立過程を追究しました。そのルーツが、彼の受けた綴方教育や、青年教師時代に遭遇した福知山洪水のあとで著した『丙申水害実況』にあると考え検証しました。それで、綴方論の方にばかり目が行きましたから、読方実践を十分に調べることはできませんでした。そういう意味で、特徴のある板書、整然とした授業を目の当たりにして、日頃の自分のだらしない授業の流し方を反省しました。参観という面もありましたが、また、校内挙げて芦田式に取り組んでおられることもあったかもしれませんが、子どもたちが落ち着いて授業に臨んでいたことに感心しました。

説明文の授業では、1 時間であれだけ内容を読み取っていけるものなのだと感心しました。私などは、段落ごとにまとめさせて、長々と引っ張り回すような授業を続けてきたように思います。今回の授業のように、簡潔に明瞭に整理され、「読む」「書く」がしっかりと配置されていて、これが国語の授業なのだと思いました。音読も、姿勢よくはきはきと読む子どもが多く感心しました。

私がとくに感動したのは、作文の授業です。何より、先生の穏やかに語りかけられる口調に、安心感というか心地よさというか、そういう雰囲気を感じさせられました。題目を言わせると

ころでの受け答え。さらにその内容を引き出すための発問。どれも見事で、その後子どもたちが意欲的に何枚も用紙をもらいに来て作文に取り組んだのは印象的でした。作文の授業に取り組みたくなりました。本来なら、翌日の批正の授業も拝見したかったのですが、できなくて残念でした。

疑問としては、授業の中の子ども同士の交流のあり方です。教師と子どもとの問答はあるように思いましたが、子ども同士の意見の交流はあまりなかったのではないかと思いました。集団として学ぶ授業の良さは、子ども同士の意見の交流にあるかと思います。この点は、波多野完治氏も指摘している点ですが、どうなのでしょう。

板書について思ってことですが、すっきりと簡潔に整理され、読んで内容が一目瞭然となり、段もはっきりとわかります。しかし、授業の中で、どのことばも先生が決めておられること、またはそれに近いものを書かれていたというように見えました。この点はどうなのでしょう。私などが下手な授業をすると、あれこれ意見が出て、まとめるのに困ってしまいがちですが、何とか、子どものことばでまとめようとします。

さて、今回は城星小学校校内研ということで、若い先生方もおられました。しかし、最近はこのような民間研究会も、ベテランや退職者が多い状況です。自主的な研究会へ若い人たちに足を運んでほしいと思います。いかに若い世代に活動を繋いでいくかという課題は、どこもおなじなのだと思いました。

暑い中でしたが、行ってよかったと思いました。ありがとうございます。残暑厳しい折、どうぞご自愛ください。　（K）

お便りをありがたく読ませていただきました。『芦田恵之助先生の綴り方教授』の根柢を流れる思想『随意選題』について研究され論文に仕上げられたこと、誠におめでとうございます。小学校現場での活動をしながら研究論文を作成された熱意に敬意と賛辞を表します。

今回初めて芦田教式の授業を見られたようですが、よい縁ができたと私たちも嬉しく思います。

感想の中にもあります、「特徴ある板書」「整然とした授業」は、教式での授業の結果です。それをよしとしない見方もあることも承知していますが、なぜこのような結果になるのでしょうか。それは、皆読・皆書・皆話・皆綴を願っているからです。さらに、事実（書かれている語句）に基づき深く考える子を育てたいと願っているからです。以下具体的にそのことを考えてみたいと思います。

皆読・皆書……は、どの子にも読む力・書く力……をつけることを授業の目標としているということです。現実には、子ども一人ひとりの状況は千差万別です。その中で、どの子にもということは不可能に思えます。が、読むこと書くこと……を楽しむ子どもを育てることは出来ます。芦田教式は、そこに焦点を当てて授業が進められるようになっています。別な言い方をすれば『学ぼうという自覚』を促す指導法であるいえます。

そこで、教式の特徴である〈四かく〉について考えてみます。

第一次指導は、各段から重要語句を書き出します。第二次指導は、詳しく読む箇所の一部あるいは全部を抜き書きします。どちらも教科書を見て視写することになります。この力は、どの子にもつけさせたい基礎的なものですが、一朝一夕には身につけられない能力です。ですから、〈四かく〉に毎回 10 分程度の時間を確保しているのです。この価値に気づかない方には、無駄な時間だと映るようです。もう一つ、子どもたちが書く時間を保障するために教師も板書します。教師は、この板書に全力を出します。その姿が、子どもたちの書写力を育てます。書き殴るような字は絶対に書きません。小学校でしか行わないことを真剣に取り組みます。それが、本当の基礎基本を大事にするということでしょう。

第一次指導では、手引きに従って書くのですが、子どもの選んだものと教師が板書した語句に違いが出た時には、子どもの選んだものを尊重するように伝えます。場合によっては、３つも４つも該当の語句があることがあります。その中から、教師は後の扱いに都合のよい語句を選んだだけのことでそこに正誤があるのではないのです。また、各自が選んだ語句には個性が出てきます。それは大事なことだとも伝えます。「授業中板書することは大事なことでテストに出る所です」と、考えておられる教師もおります。また、子どもの側もそう認識しているようです。私たちは、その教材を理解する手掛かりになる語句を書き出すことによって、全体が鳥瞰でき、力の弱い子でも授業に参加できるところに価値をおき

ます。どんな語句を書き出したかをお互いに批評する方向に意識を向かわせません。もちろん、手引きから外れた語句を書いていると追求することもしません。それは、各自に委ねます。要は、ある一つの視点で各段から言葉を選んで書き出し、全体を眺めると一つのまとまった話に整理できることを体験させているのです。学び方を学ばせている、或は自学自習の力を養っているといってもよいでしょう。

〈四かく〉で板書と違っていたらそれを自分の書いたものの下に写してもよいし、そうしなくてもよいと話しておきます。机間指導をしながら子どもたちの様子を観察し、大きな乱れがあるときには、手引きが悪いと言えます。これは、教師の反省材料です。ここまでで〈五よむ〉に進みます。この時に、机上を整理させます。黒板に集中するためです。４年生までは、指黙読・指音読と二つの読ませ方をします。これは、声のよく出ない子、言葉のまとまりを一目で掴むことが難しい子が、〈一よむ〉で順繰り読みをするときに声が出るように、音節などのまとまりを意識して読めるように訓練しているのです。もちろん、中身をしっかり考えるために黙読・音読するのですが。〈四かく〉と〈五よむ〉にはそういうつながりもあるのです。芦田教式の〈一よむ〉…〈七よむ〉は相互に有機的に繋がっているのですが。

第二次指導の〈四かく〉は、段落全部を書いたり、会話文だけを書き出したりいろいろなケースがあります。ここは、書き出すところをしっかり確認し、場合によっては教科書に印をつけさせたりして視写させます。視写は、手で読むといい、一番ゆっくりとした読み方であり、深く正確に読むことにも通じます。また、一つのまとまった文章を書き写すのですから作文の基礎を育てていることにもなります。続く〈五よむ〉では、指黙読・指音読を通して句読点を意識させたりすることができます。指〇読の「指」は指揮の指です。指揮棒＝鞭の振り方で読ませ方が決まります。教式の中で一番難しいのがこの鞭の振り方です。半呼吸前を指すと学級全員が揃った読みになり、内容の読み取りにも直結します。教師が教材をどの程度に読んでいたかが鞭に現れると先達は指摘しています。先ほど、４年生まで指〇読すると書きましたが、５年生以上は〈一よむ〉の続きで順繰り読みをします。それは、児童の発達段階を考えてのことです。４年生まで鞭を振り振り音読の訓練し、どの子も独り立ちできるように育てます。学級の代表として音読できる力をどの子にもつけることが国語科の指導の第一歩であり、最終目標でもあるのです。

これまで〈四かく〉の意義を述べました。しかし、この時間がもったいない、事前に模造紙に書いて貼ったら時間の節約になり、話し合いの時間が確保できると指摘する方がたくさんおられます。事前に書いたものを次々に張り出していく授業は、校内研究会や公開研究会でよく見かけられます。それは、話し合い活動に十分な時間を確保し、活発な意見交換があることがよい授業だという、教育界の常識があるからでしょうか。活発な意見交換がどの子にも国語の力を育てることにつながっているかどうかは授業をよく観察しないといけないようにも思います。もちろん、素晴らしい実践をされる先生方の授業を拝見することもありますが、多くはその場限りの見世物授業という感をいだかせることがありました。話し合いができるということの前提は何でしょうか、考えさせられてしまいます。

次に、〈一よむ〉は、原則全文を順繰りに音読します。１時間目はもちろんですが、２時間目以降も全文を読みます。これは、前の時間に学んだことを全文の中に位置づけさせることを大切にするからです。毎時間の授業の山は、〈四かく〉で板書された語句、文章の探究です。そこで考えたことを文章全体に戻して考えて、今日の授業につなげることを考えるからです。芦田教式では再構成し単純化していきますので、全文の中の位置づけをいつも考えさせるためにも〈一よむ〉を大事にしています。順繰り読みをさせるのは、どの子にも機会を公平に与えることが音読の力を育てる近道だと考えています。これが、学級を落ち着かせる秘密の一つです。〈四かく〉〈五よむ〉にもその秘密があるのですが。こうして落ち着いて学習できるということは、どの子も学習に参加できる雰囲気が学級に生まれるということです。

〈一よむ〉に１０～１５分、〈四かく〉に１０分割くと〈二とく・六とく〉にそれぞれ１０分も時間が取れません。ですから児童相互の話し合いの時間が十分にとれません。そこで、精選された教師と子どもとの問答で進行することになるのです。でも、どの子も一緒に話の流れに沿って考えを巡らせています。問いと問いの流れの工夫が教師の関心事です。一問一答という言葉がありますが、記者会見のような場での一問一答とは質が異なります。細切れにあちらこちらに話が飛ぶようなことはないのです。問いが自然で、考えが深まるように教師は教材を再構成しているのです。だからこそ、分かる喜びを味わうことができるのです。一人で読んだだけでは到達できない問いを考えます。また、子どもたちの話し合いだけでは気づかない視点を問いの形にしていくのです。そこが、芦田教式の肝です。

参 加 者 の 感 想

自分の感じたことを表現することは大事なことです。また、相互に意見を交換することも大事な教育活動です。ですから、芦田教式では作文を大事にしています。また、話し合い活動については、私は、他の教科や話し合い活動が主となる国語の教材でその充実を図るようにしています。理科や社会、算数などの教科は、具体的な事象について考えるので多くの子が話し合いに参加できるように思います。

質問・疑問点が解消したでしょうか。

学校現場にいることは幸せです。子どもたちと授業ができることも教師の喜びです。７４歳になる私は、４０歳で担任を外れたり、行政にも籍をおいたり、管理職もしたりして授業をする機会が少なくなりました。定年退職後、再任用教員として初任者指導の担当を２年しました。計８名の初任者（講師経験者３名含）の授業を参観したり、私が授業をして見せたりし、授業できる楽しさを味わいました。その後、４年間、少人数指導の講師として算数の授業をしました。地区では算数部会でまとめ役を長年続けていましたので、この間も地区の学習会等で講師としても話をさせていただきました。そんな中、６５歳から７０歳までに１００クラスでの国語の出前授業を志し、７０歳までに１００校以上学校で３００回以上の授業をすることができました。多くは、初めての学級でしたが、教式はどの学級でも楽しい授業ができることを実感しました。児童の感想文の中には、国語ってこんなに面白いの、教科書を深く読むといろいろことが発見できる、こんなに長い詩を覚えられるなんて自信ができた等が書かれていました。それが原動力となり最後までゴールできました。感慨一入です。今、新たに８０歳まで出前授業をしたいと密かに思っています。休み明けには、数名に依頼状を出したいと計画しています。

お手紙に触発されて湧き出てきたことを書かせていただきました。ありがとうございました。